

今週の為替相場見通し(2022年3月28日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		119.10 ~ 122.44	122.10	121.00 ~ 123.50
ユーロ	(ドル)		1.0961 ~ 1.1070	1.0982	1.0850 ~ 1.1100
(1ユーロ=)	(円)		131.40 ~ 134.72	134.20	133.00 ~ 136.00
英ポンド	(ドル)		1.3121 ~ 1.3299	1.3183	1.3050 ~ 1.3250
(1英ポンド=)	(円)	*	156.38 ~ 161.50	160.93	159.50 ~ 162.00
豪ドル	(ドル)		0.7374 ~ 0.7537	0.7514	0.7400 ~ 0.7600
(1豪ドル=)	(円)	*	87.84 ~ 92.01	91.75	90.50 ~ 93.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 グローバルFIチーム 大庭 泰典

(1)今週の予想レンジ: 121.00 ~ 123.50 円

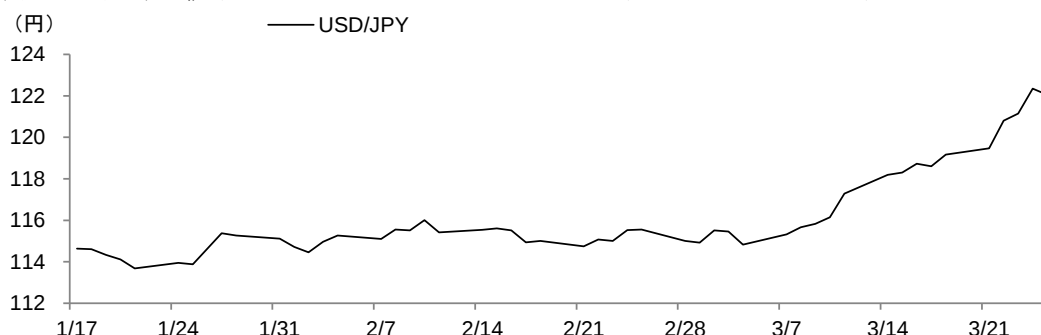
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は一時122円台前半まで上昇。週初21日は東京休日の中、119円台前半でオープン。パウエルFRB議長の講演をNY時間に控え迫りレンジでの推移が続いた。パウエルFRB議長の講演の事前原稿では景気よりもインフレ抑制を重視するような内容となり、質疑応答でも「+50bpの利上げが適切と思えばする。」「もっと早く動かなければならないと結論を出すかもしれない」等、5月の+50bpの利上げ期待を強めるような内容となり、米2年債金利が2.13%台へ上昇する動きに、ドル/円は119.50円まで上昇。22日は、黒田日銀総裁の出口戦略について話すのは時期尚早との発言で金融政策の違いが意識され円が売られる中、心理的な節目である120円を突破すると更に上昇し、一時121.03円まで上昇。米金利が一旦落ち着く動きに120.39円まで反落。その後は狭いレンジ内での推移が続き、120円台後半でクローズ。23日は、米2月新築住宅販売件数が予想を下回ったものの、反応は限定的。年末までに2.5%までの利上げを支持するタカ派のメスター・クリーブランド連銀総裁が、「市場は利上げとバランスシート縮小の同時進行を対処できる」と発言し、ハト派で知られるデーリーSF連銀総裁も「+50bp利上げする必要があるらそうする」と発言したこともあり、低下していた米金利がやや戻す動きに121.14円まで戻した。24日はハト派寄りとされるエバンス・シカゴ連銀総裁が+50bpの利上げを支持したことなどを背景に円売り・ドル買いが勢いづき、122.41円まで上昇。週末25日、一時前日高値を更新し122.44円を記録するも買いは続かず、週末を控えた調整売りから121.18円まで下落。しかし、米金利が高止まりする中、ドル/円はじり高で推移し、122.10円で越週。

今週のドル/円相場は引き続き日米金融政策の方針の違いによる日米金利差の拡大を受けてじり高を予想。ただし、前週、あまりにも短期間の上昇だったことを背景に年度末でのポジション調整が警戒されているため、上値も限定的か。特に投資家は、日本政府が足許の円安進行に対して牽制発言を「いつ」、「どの水準」でしてくるのか、警戒心は高いと思われ、発言一つをきっかけに売り戻される時は、利益確定売りも巻き込んで前週の上昇幅を打ち消す可能性には警戒しておきたく、東京時間の値動きにも目を離せない展開か。ボラタイルな日々が続く中、指値注文も併せて相場急変時に備えておきたい。今週の経済指標は29日(火)米3月消費者信頼感指数、30日(水)米10~12月期GDP(確報)、4月1日(金)米3月ISM製造業景況指数、米3月雇用統計が控えている。

(3)先週末までの相場の推移

先週(3/21~3/25)の値動き: 安値 119.10 円 高値 122.44 円 終値 122.10 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 上野 智久

(1) 今週の予想レンジ: 1.0850 ~ 1.1100 133.00 ~ 136.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は方向感の乏しい展開。21日、オープン直後に一時週高値の1.1070をつけたものの、その後はパウエルFRB議長の講演においてタカ派的な内容が伝わると、米金利が急上昇しドル買い優勢となる中で、ユーロ/ドルは1.10台前半まで反落。翌22日も、相次ぐFed高官によるタカ派的な発言に米長期金利が上昇、ドル買い地合いとなりユーロ/ドルは1.09台半ばまで下落。しかし、一巡後は欧州株の堅調推移が支援材料となり1.10台半ばまで反発した。23日、ユーロ/ドルは欧州株の軟調推移が重しとなり1.09台半ばまで値を落とすも、米金利が低下したことや米経済指標の冴えない結果にドル売りが強まり、1.10台前半まで値を戻した。24日、ユーロ/ドルは米金利上昇に伴うドル買い圧力に1.09台半ばまで値を落とすも、その後はユーロ圏3月PMIの良好な結果に1.10台前半まで反発し強弱まちまちの展開となった。25日は米金利の動向に浮沈する展開であったが、終始1.10付近での推移にとどまり、1.09台後半で越週している。

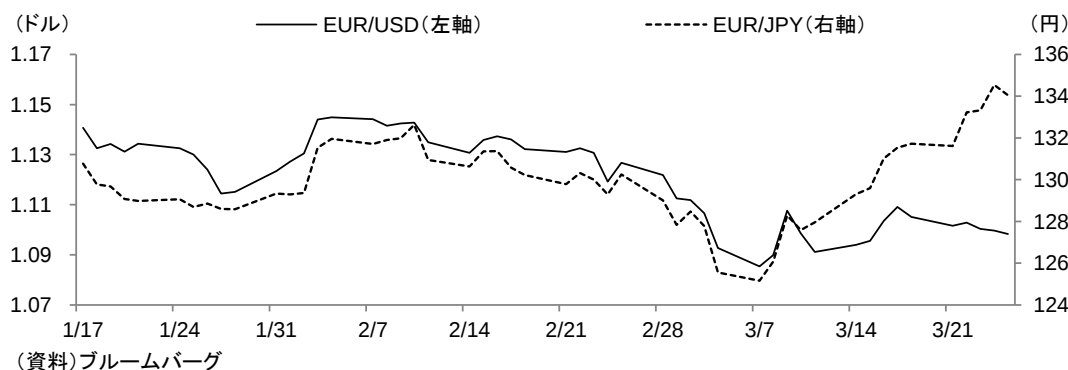
今週のユーロ/ドル相場は動意薄の展開を予想。23日、ロシアのプーチン大統領はロシア産天然ガスの支払いに関してルーブル建ての支払いを求めると表明。軟調なルーブル相場の下支えを狙った施策だとみられる。このロシアの動きについて、欧州各国は反発しているが依然としてロシアの天然ガスに依存している状況であることが再確認された格好だと思う。また見方を変えるとロシアは経済的なデメリットを忌避し、天然ガスの販売停止という決断をしなかったともいえる。欧州もロシアにおいてもこれ以上の状況の悪化は望んでいない状況なのではないか。それらを踏まえると、喫緊で地政学的リスクが急激に増大するような行動が顕在化するリスクはそれほど高くない印象でユーロは方向感の乏しい時間帯が続くのではないかと。とは言え、ロシアによる化学兵器などの使用や民間人の犠牲者が急激に増えるような軍事的行動が見られた場合、さらに踏み込んだ経済的・軍事的な分断が生じる可能性も否定できない。目先のユーロの動静は引き続きウクライナ情勢を見据えた動きになる。

(3) 先週までの相場の推移

先週(3/21~3/25)の値動き:

(対ドル) 安値 1.0961 高値 1.1070 終値 1.0982

(対円) 安値 131.40 高値 134.72 終値 134.20



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.3050 ~ 1.3250 159.50 ~ 162.00 円

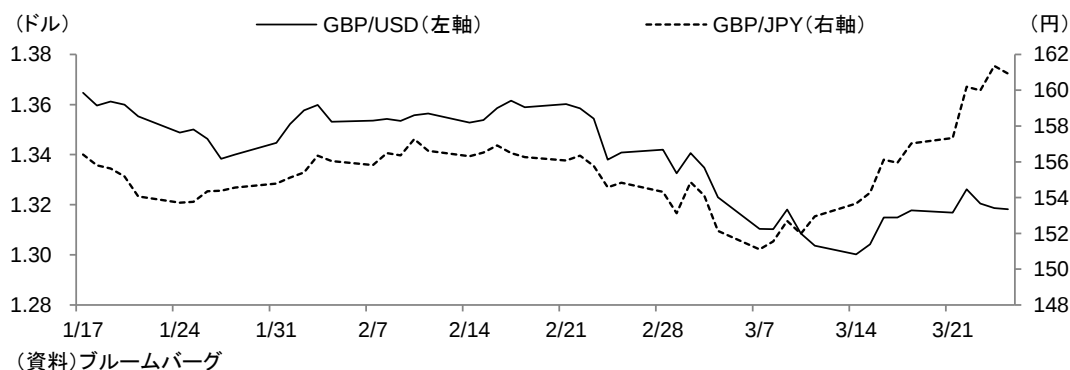
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、主要通貨に対して明確な全面高が先行。その後週引けまで、対円では堅調気味の、対ユーロでは軟調気味の横ばいに終始したが、対ドルでは一段水準を切り下げた上で方向感を欠いた膠着に陥った。ここもとの主要通貨市場では急速な円安進行が注目を集めていたが、週明け21日は日本が休日だったこともあって円安進行はひと休み、通貨市場全般にも一服ムードが漂った。翌22日は欧州勢の参入前後から明確なポンド全面高が進行。対円、対ドル、対ユーロなどで一斉に水準を切り上げたことから、なんらかのポンド買い要因が存在したのは確かだったが、その要因ははっきりしなかった。市場の一部では、翌23日に発表を控えた①英2月CPIや②英春季予算を材料視する声も聞かれたものの、正直、説得力は感じられなかった。結局、最も説得力があったのは、③円安進行の一環として、ポンド/円の急騰がポンド全面高をけん引したとの見方。22日、ドル/円は東京時間に120円を突破、約6年ぶりの円安水準に突入したが、その勢いのまま、欧州時間になるとポンド/円も158円を明確に突破。ポンド/円の158円水準は、昨年10月に158.22円、今年1月に157.76円、2月に158.07円と三番天井を打っていた水準で、同水準を明確に上抜けたことで、損失確定の買い戻しや、新たな買い持ちポジション構築の買いが続出した可能性が考えられた。23日、ポンドが対ドルで明確に反落したのは、ドル側の要因と考えられた。米連銀パウエル議長が+50bp幅の利上げ実施に前向きと取れる発言をしたのは21日のことだったが、その後、23日にかけて米長期金利が明確に上昇。米連銀パウエル議長発言とは時差を置いてドル高を促した格好になった。

今週の英ポンド相場は、対ドルで軟調を、対円、対ユーロでは方向感に乏しい横ばいを予想。先週(22日)観察されたポンド全面高の要因は、結局、釈然としないままだった。上述①については、英中銀金融政策委員会が、ウクライナ紛争の余波を受けた英景気減速を警戒し、市場全般の思惑よりも追加利上げに慎重な姿勢を17日に示したばかりで、とりわけCPIの上振れだけを警戒する理由は知れなかったし、②に至っては、事前に、ポンドに直接影響するような論点は全く観測されていなかった。①のように、ポンド上昇の言い訳に英中銀追加利上げ観測を挙げておきながら、実際に発表された英2月CPIが市場予想を上振れた途端にポンドが全面安に転じたような値動きは滑稽ですらあるが、通貨市場が各国中銀の金融政策動向に大きな関心を払っているのは疑う余地がない。先週発表された英2月小売売上高が市場予想を大幅に下振れた事実により、英中銀が、ウクライナ紛争の供給する物価上昇圧力と景気下押し圧力のバランスを取るのに苦慮しているのは間違いなからう。その点、欧州中銀もほぼ同じ立場にあるのとは対照的に、あくまでも相対的な立ち位置の問題だが、米連銀は物価抑制に注力できる(景気減速を懸念しなくてもいい)立場にあるように思われる。それが対ユーロでの横ばいと、対ドルでのポンド軟調を見込む理由。同じ文脈で、金融引き締めで周回遅れとも言える円に対してはポンド続伸を見込むべきところ、横ばいを見込むのは、過去2週間余りの円安進行に、調整局面が近いと見込むから。インフレ格差や金融政策の方向性の違い、経常収支動向など円を売り込む要因は確かに揃っているものの、2週間で6円(-5%)を超える(対ドル)ような円安は、流石に急速過ぎるのように感じられる。英経済指標では、31日(木)に英10~12月期経常収支、英10~12月期GDP確報値の発表が予定されるが、ポンドが大きく反応する可能性は高くないものと思われる。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(3/21~3/25)の値動き: (対ドル) 安値 1.3121 高値 1.3299 終値 1.3183
(対円) 安値 156.38 高値 161.50 終値 160.93



4. 豪ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 大谷 未央

(1) 今週の予想レンジ: 0.7400 ~ 0.7600 90.50 ~ 93.00 円

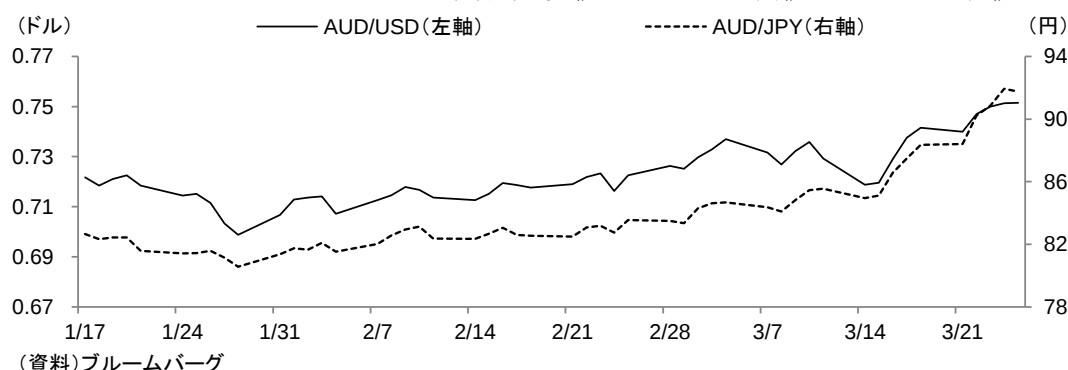
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は上昇する展開。週初21日0.7410付近でオープンした豪ドルは、堅調な商品価格などを背景に買い優勢の展開となり、0.74台前半まで上昇。しかしその後は株価が下落したことや海外時間にパウエルFRB議長の発言を控える中、上値重い値動きとなり、週安値である0.7374まで下落。その後0.74台前半を回復したものの、パウエルFRB議長の講演で、インフレ急伸への懸念を述べ、必要に応じて通常よりも大幅な利上げを行う可能性があると言及。米金利が上昇する中、豪ドル0.74ちょうど近辺まで下落した。翌22日は海外時間に米株式市場が大幅上昇をしたことを受けて豪ドルは0.74台後半まで上昇。23日は翌日にブリュッセルにてG7首脳会議を控える中、ロシアへの追加制裁が懸念され原油価格が上昇。また、米金利が上昇一服となる中で、豪ドルは0.75台前半まで上値を伸ばした。24日は、オセアニア時間には豪国債利回りが低下したことで豪ドルは.74台後半まで下落したものの、その後海外時間に入り、米株価が大幅上昇となる中、豪ドルも上昇に転じ0.75台前半を回復。25日は、底堅い株価の動きを横目に豪ドルは週高値である0.7537まで上昇。しかし、米金利が急上昇する中で、その後は上値を抑えられ0.7515付近で越週した。

今週の豪ドル相場は底堅い推移を予想する。先週の豪ドルは資源価格の高止まりや景気回復期待から上昇する展開となった。22日のロウ豪中銀総裁の発言では、利上げ時期に関する追加的な情報はなかったものの、先週発表された豪3月PMIは総合、製造業、サービス業いずれの指数も前月比より上昇する結果であった。豪州のファンダメンタルズは良好であるとの見方が強く、引き続き市場の利上げ期待は豪ドルを下支えすると考える。今週は29日(火)に豪2月小売売上高、31日(木)に豪2月住宅建設許可件数の発表を控えている。豪1月小売売上高は、オミクロン株の感染拡大の中でも前月比+1.8%と好調な結果であったが、豪政府は2月21日より海外からの観光客等の受け入れ再開しており、今回についても好調な結果になると考える。また、ウクライナ問題の長期化を受けた資源価格の高止まりも豪ドル買いの要因となり、来週の豪ドルは底堅い推移を予想する。

(3) 先週までの相場の推移

先週(3/21~3/25)の値動き: (対ドル) 安値 0.7374 高値 0.7537 終値 0.7514
(対円) 安値 87.84 高値 92.01 終値 91.75



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。